

日本カメラ博物館 JCI ライブラリー
学芸員 宮崎真二

藤澤信（1903-1975）は、1927年に東京帝国大学理学部化学科を卒業し、東洋乾板株式会社に入ります。1934年の富士写真フイルム株式会社合併後は、同社にて乾板部長、研究所長、副社長など要職を歴任し、ヨウ化銀相反則不軌の研究およびカブリ抑制剤、カラー写真などの技術発展に寄与しました。

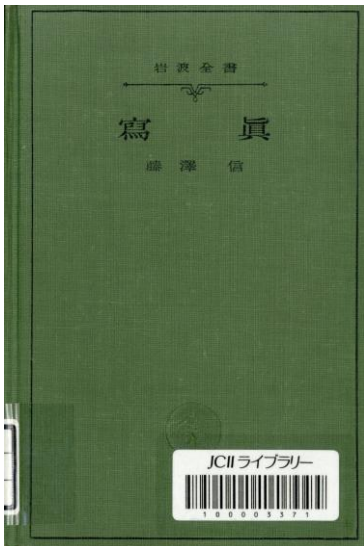
写真雑誌への寄稿としては、1930～40年代の『アサヒカメラ』で感光材料の技術記事を執筆しています。戦後復刊第一号となる『CAMERA』の1946年1月号には「研究の構想」を寄せ、戦争が終わってこれから手がけたい分野として「感光理論」「写真用ゼラチン添加剤」「天然色写真」を挙げています。

また『カメラ毎日』では、1954年6月の創刊号から1957年12月号まで「写真よもやま話」を連載しました。本連載は海外の話題、用語の意味や由来、調査統計などを基にした写真とカメラに関する話を、洒落を交えた軽妙な内容にまとめました。『写真工業』では、1972年1月号から翌年3月号まで「写真随想」を連載しました。開始から12回分は、写真をはじめた旧制高校時代を起点として、思い出に残る出来事や研究テーマを振り返り、あとの3回分では将来写真がどこまで発展するかとの考えを述べています。同時期に『カメラ毎日』では1973年1月号から6月号まで「温故知新」を連載し、「写真」という言葉の意味や天体撮影についての考察を行いました。

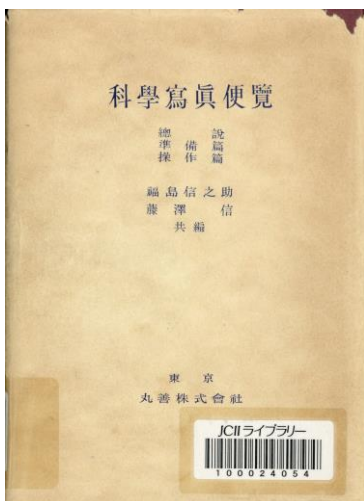
著書では、1934年に岩波書店から『写真』を刊行しました。本書はアマチュア向け技法書とは一線を画し、感光材料に対する光の作用、感光材料と用具、ネガ作成から測定への流れなど「科学研究手段としての写真」（序文）の理論と実技について記述した学術書でした。前述の「写真随想」では、1972年5月号で本書刊行の経緯などを詳細に語っています。

1948年には『科学写真便覧 総説 準備編 操作編』（丸善）の編集に携わりました。本書も写真を科学研究、産業目的で活用するためのハンドブックとして企画されました。内容も「総説」は感光理論にはじまり、「準備編」は光学ガラス、感光材料、薬品、撮影現像設備、「操作編」は光源、カメラ、現像・印画作成法、測定法などについて解説が行われています。1950年には第二分冊となる「応用編」を刊行しました。こちらでは写真測量、司法写真など専門分野に特化した写真・映画技術に加え、レンズコーティングなど本書編集中に著しく発達した事項を追加して解説しています。

学術書の内容からは専門的で難解な印象を受けますが、一方で雑誌連載では平易かつ軽妙な文章で読者にわかりやすく構成しています。その背景は藤澤の豊富な知識と教養、そして明朗快活な人柄に裏打ちされています。



『写真』



『科学写真便覧』